

2019S セメスター留学報告書

今井求紀

日本を出発してから早5か月と少し。到着した初日の北京はひどく雪が降って、便が遅れたことを考えると夏の北京は少し暑すぎる。6月から35度を超える暑さで最高40度にまでなるが、冬には毎日氷点下とは日本の気候に慣れ切った体には酷だ。何はともあれ、天から地まで、さらには人も全く違うようなところにきたのであり、生活も当然違った様相なわけである。日本を発つときにもこの5か月とあと半年がどんなものになるのか想像はしてみたものの、やはりこの5か月で実際に経験したものはその以前には想像はできないものだった。

北京大学に到着したのはちょうどバレンタインの日だったが、そんなものはそっこのけで羽田では便の変更がどうのこうの、北京首都空港に到着すれば寮までの行き方、寮に到着すれば寮の登録、入居だなんだとあたふたとしていた。ひと段落したところで学食にご飯を食べてみたいということで学食まで早めの夕食を食べに行くことにした。学食については日本にいたときから北京大の友達からいろいろと噂を聞いていて、なんせとにかく安いと、さらにインドにいたときの中国人の友達からの情報では中国の学食は結構いけるという話だったので、非常に期待をもって学食に向かった。中国の学食は専用のカードで支払いをするシステムだということも聞いていたので、よくわからないがその時持っていた唯一北京大学らしき組織から支給されたルームキーをもって学食につき、片言の中国語を使い何とか注文をした。ところが専用の場所にいくらルームキーをかざしてみても全く反応しない。後ろにはたくさんの方が少しでも早く食にありつこうと急いでいるのに、その先頭で言語もろくに通じない外国人があたふたしているというのは、その外国人には全く耐え難い状況なのである。しかし、どうしようにも仕方が分からない。このカードがまちがったカードなのか、はたまたチャージが必要なのか、カードはどこで手に入れ、どこでどうやってチャージをすればいいのか。なにもわからない。イラつきの絶頂にある中国人の列と食事が提供される窓口に挟まれ、絶望を感じたその時、後ろからずっと赤いカードを手にした手が伸びてきて機会にカードがかざされた。ピッ。一瞬の間何が起きたのかわからなかった。だが目の前の学食のおばさんの顔によれば、どうやら自分は救われたらしい。これは感謝をしなければと振り向き、なぜかこちらには目もくれず遠ざかっていく人影を声をかけては追いかけ、上の階で彼が席に着いたところでやっと彼に追いつき、お礼を言った。シェイシェイ。そして現金を出して、お金を支払おうとすると、救い主はそれを受け取らない。どうということ全くわからないが、よく聞けば「要らないよ。いいんだ。」とっているらしい。そういうわけにはいかないのです日本だとしたら少ししつこいくらいに払わせてほしいと頼んだのだが、ついに断られ切ってしまった。「困ったときはお互い様だよ」と爽やかに言われ

ると、もうこれ以上は失礼だと思いお金を引き下げ、再度ありがとうと言わせてもらった。結局彼とは少し話をしたのだが、なんせ当時の中国語力では会話にならないので、彼がどういう人かについて知ることはできなかった。しかし、この小さな事件はその後の中国生活で何度も中国人に対する見方を考え直させてくれる経験になった。



学食めし。少し汚く持ってあるのがポイント。安くておいしい。

学食のスーパーstar麻辣香锅。かなりの人気者。



一日目にだいぶと字数を割いてしまったが、はじめの数週間はほかにも事務手続きや以前からの北京大学の友達とのご飯、留学仲間との会合などいろいろなことがありかなり充実した生活を過ごした。授業選択もあったのだが、こちらの友達の助けもあり授業の方も問題なく選ぶことができた。来たときには英語でほとんどの授業をとって、一つか二つくらい中国でなどと思っていたが、ふたを開けてみるとすべて中国語の授業。授業一覧の英語開講授業にあまり興味のあるものがなく、英中二カ国語使用となっている授業を二つとって何とか英語の時間を確保したつもりだったが、いざ授業を受けてみるとほとんど中国語、一つの授業に関しては2回目の授業で英単語を2、3聞いた程度で全くどこが英中2カ国語なのかわからない。なんせ当時中国語は全くだめだったので、授業に出ても何を言っているのかわからない。あまりにもわからな過ぎて一学期を終えたからといって、わ

かるようになるとは到底思えなかった。課題が何かわからないどころか、課題があるのかどうかもわからない。とにかく中国人の友達のアドバイスに従い授業を録音し、それを聞きなおしていた。録音を聞き、辞書を引きながら、というより辞書で音が近いものをひたすら探し予測をするという仕方でするので、とにかく時間がかかる。そのうえそれでも何を言っているのか自信を持ってないのでどうしようもない。何とか各授業で課題があったのかどうか聞けるような知り合いだけを作り、課題をこなして、あとは録音を聞く。授業にでるのもほぼ録音しに行っているようなものだった。もちろんそこでも辞書を引引きと頑張っているのだが、明らかに闇雲な授業の受け方で単位はおろか、何か学べるのか不安だったし、本当にこんな授業選択でよかったのか信じることはできなかった。

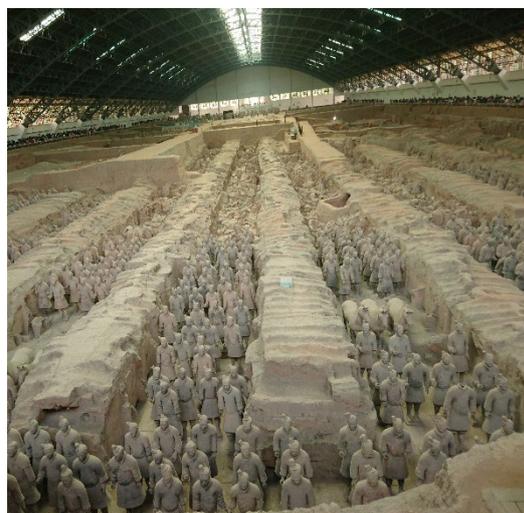
そんなこんなである意味で無限の量の学習対象があったのだが、もちろん毎日勉強だけして生きていたわけではない。中国に来る前の一学期で映画方面の学問について少し学ぶ機会があり、その影響で映画に興味を持つようになっていた。中国では日本のTSUTAYAのようなものはなく、どうやらオンラインで映画を見るのが一般的らしいというのを聞いていたので、中国についてすぐにインターネットで自分の気になっていた映画《天注定》を調べてみた。中国のオンライン視聴サービス領域は非常に発達しており、公式に様々な映画、ドラマやエンターテイメント番組のようなコンテンツを提供する会員制のサイトが複数存在しており最も主流なのだが、到着したときにはまだオンラインサービスに課金をすることにあまり不慣れだったこともあり、またこの映画が中国政府の規制対象で禁止されていたこともあり、とにかく法的にグレーというよりは若干ブラックな見てくれのサイトで視聴した。中国のオンライン視聴サービス領域が発達しているというのは、実のところ、こういった無料で映画、ドラマなどを提供するサイトが大量に存在しており、オンライン視聴だけでなくほかにもいろいろな方法で作品を鑑賞する方法がたくさんあるという意味でもある。いろいろと試し、最終的には会員制のサイトに落ち着いたのだが、それでも会員制のサイトでは視聴できない作品などもあり、いまだに合法なのか不明な方法を使うこともある。なんせ一つの授業の期末課題で視聴しなければいけない作品が見つからないので仕方がない。そのほかにも、先述のような政府によって規制対象になっている作品もたくさんあり、そういった作品を鑑賞するにはグレーな方法をわざと得ないのである。規制されている作品を鑑賞することの是非やグレーな方法などあまり公的な文章に適さない内容な気がするので、この程度にするが、とにかく中国についてからかなりの量の映画、ドラマを見た。特に中国のドラマなどを見ると中国の社会事情や文化背景が強く反映されており、なかなか面白い。中国の文化理解という意味でも、今まで知識で知っていたような習慣も含め、中国人の価値観や生活について実に迫った理解ができる。それまで奇妙に見えた習慣や行動パターンについてもそこに一定の道理のようなものがあり、それが理解できたときにはじめてそうしたしぐさの意味、さらにはそれらが作り上げる世界の形がやっと見えてくるようなところがあり、そしてそれらは往々にして具体の形からはじめて真の意味で理解されるので、やはり映像作品というのものなかなかバカにできないなと思う。

そんなこんなで、授業に映像作品に友達との遊びなどと学期生活は充実しており、授業に関してもやっと慣れてきて、課題があるかどうか、だいたいの課題の内容、授業の話題程度理解できるようになってきたところで、旅行が現れた。この度中国の土をふんでから旅行に行っていなかったのだが。3月に入ると北京大学の担当支部である元培学院から呼び出され、武漢への旅行を企画している、あとで通知をするので興味がある人は参加をすべしと説明を受け、実際に4月には旅行の通知が来たので、すかさず参加を希望した。いきなりのことだったので驚いていたのだが、費用まで元培学院が提供するというから驚きである。まさに棚からぼたもちといったところだが、この旅行はかなり良かった。普段知り合う機会のない様々な国から元培学院に留学している本科生の留学生たちと知り合うことができ、旅行自体が充実したものだけでなく、その後の留學生活にとっても大きな糧になった。4月の末から5月の頭にかけて中国では大型連休があり、授業の予定との関係でさらに長期の連休になったので、大宮君とともに洛陽、西安、開封という中国華北の古代首都めぐりの旅に出た。今年の日本は新天皇即位の関係で大きなゴールデンウィークだったらしいが、こちらも負けじと11泊12日の長旅をしてやった。この三都市はどれも楽しく、食もおいしいのでとても満足できる内容だった。特に洛陽古城内の十字街、西安の回民街や開封の夜市といった屋台通りとでもいうべき食べ歩きのできる通りが楽しい。兵馬俑もいいのだが、やはりご飯がおいしく楽しく食べられるのは何よりもうれしい。この三都市は黄河沿いに並んだ三都市でもあり、地理的に近く、食文化も近い。西安はシルクロードの一端であり、この三都市の食はどこか中央アジアの香りがする。これは比喩ではなく本当に中央アジア的な香りがするのである。自らは中央アジアに行ったことがあるわけではないのでわからないが、大宮君は正しく実際に正しく覚えていればトルクメニスタンに行ったことがあり、中央アジアの食について知っているが、やはりそういていた。泡饅、胡辣湯などを食べると明確にその中央アジア感を感じられるのだが、一体どこからその香りが来ているのかが分からない。スパイスの香りなのは確かで、おそらく胡椒なのだと思う。しかしただ胡椒を使っただけでは作り出せない独特の香りと味がする。また、西安では饅と呼ばれる類のパンのような食べ物があり、これもまた中央アジアから南アジアで見ると似たような見た目と味なのである。何はともあれそんな陝西料理を食べていると何か悠久の歴史の流れをかすかに

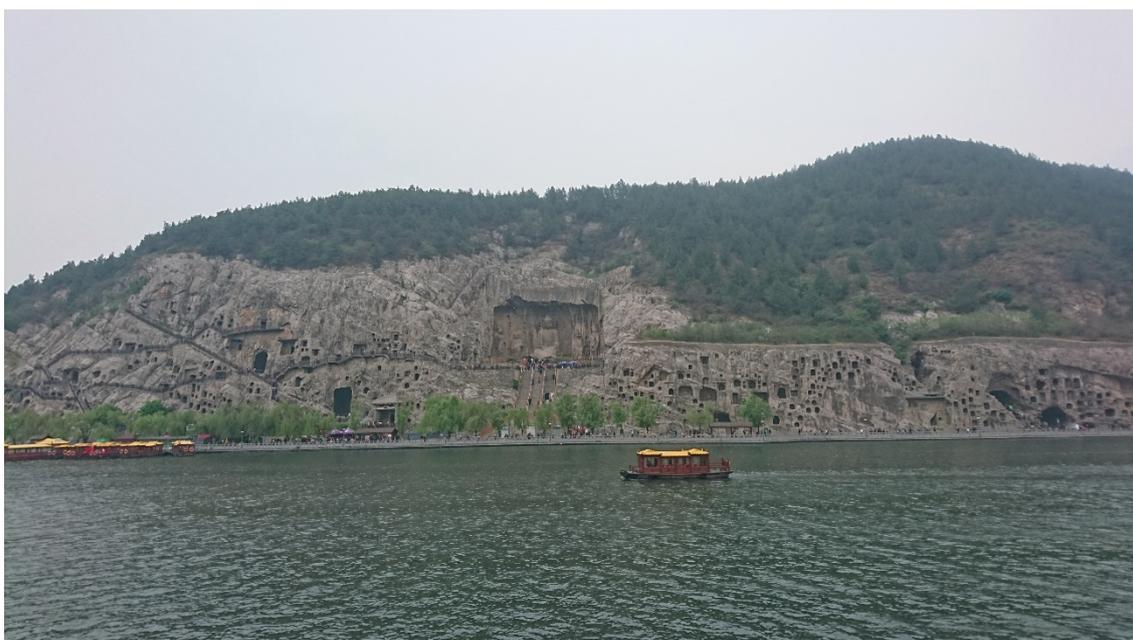
感じる。



噂の泡馍。非常においしい。ただ量が多い。



兵馬俑。とてつもなく兵馬俑。



竜門石窟。かなり大きく、とてもたくさんの石製仏像が見られる。

旅行から帰ってくると、旅行で盗まれた携帯の後処理とお土産配りを除けばまた学期生活が日常と化すわけで、ここまでくると北京大での生活が完全に日常になっていた。時折、しばしば、日本の友達、家族を思い出しては恋しくなっていたが、しかし同時に目の前に続く日々が明らかに自分の日常であるという意識は芽生えていた。このころになると、授業時間中から大まかな内容はつかめるようになっていた。中間の課題に関しても読み物と書き物がメインだったのでほとんど問題なく取り組めた。しかし、授業課題のグループ

ワークに関しては非常な困難を感じた。とにかくグループチャットで人々が発する言葉の意味が分からない。選択した授業はどれも自分一人を除いてすべて本科生という環境だったので、授業設計自体が交換留学生を想定していない。当然生徒の方もまさか自分のグループに言語もろくに通じない外国人が入るものだとは思っていない。一つのグループは幸い授業を通じて作った友達がいたので、彼の助けもあり、またメンバーの経験と理解のおかげもあり、グループ内である程度の貢献もできたし、内容もたどたどしくはありながらも理解できた。ただ、もう一つのグループに関しては大変だった。誤解とチーム進行の遅さなどでなかなかチームに貢献している感じがしなかった。一年生の授業だったのでそもそも誰もこうしたチームごとにあまり慣れていないということもあったのだろう。ともかく、チームのコミュニケーションがうまくいっていないところで、なんとかチームを活性化しようと努力するとかえって混乱を引き起こし、状況をさらに悪化させてしまうという感じだった。結局全授業を通じて、これだけが悔いの残る結果になった。ほかの課題に関しては我ながらなかなか悪くはないなという感じだったし、結果成績もどれもまあよい、というよりは各教師に感謝しなければという感じだったので、それだけにこの一件は悔しい。結局読み書きはある程度できてコミュニケーションとなるとまだまだ程遠いのだなというのを自覚させられた。

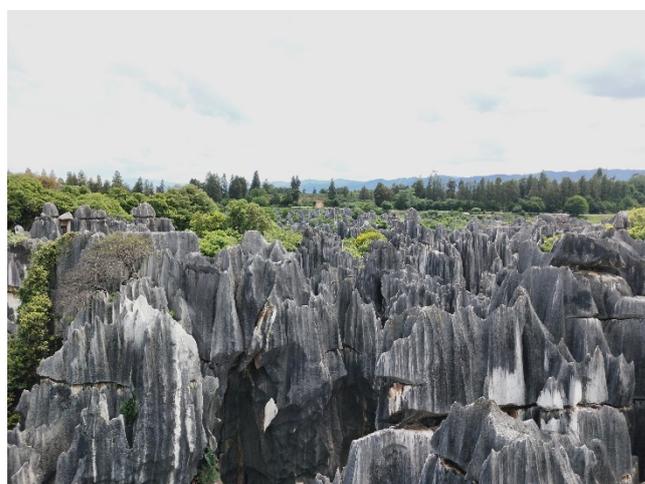
コミュニケーションという話でいうと、現地の友達との関係は割と悪くないと思う。前述のように着いた当初も現地生徒の交流は多い方だった。日本にいたときから何かと中国人と知り合う機会が多く、特に北京大生の知り合いも多かった。中国についてからも彼らと交流を続けていた。今思うとそれでも当初の交流はやはりたどたどしく、少し不自然でもあったが、一学期も交流を続けていると普通に友達といった感じでだいぶと自然な関係に落ち着いたような気がする。相変わらずこちらの中国語は初心者感が抜けないが、それでもコミュニケーション自体にそれほど不自然さを感じない。不思議である。なるほどコミュニケーションは言葉じゃないなどというのも一理あると思う。中国人の友達と交流をしていると、意外なところから全く違った世界観、価値観が垣間見えるから面白い。中国人の習慣や行動、規範意識など中国人の視点から出た見方で聞くとなかなか違った見え方がするし、意外なところから新たな意見が出てくるときなどは自らの考え方がどれだけ縛られているか考えさせられる。ただ、今学期新たな現地の友達を作るというミッションはあまり達成できなかったように思う。一つには部活動に参加できなかったこと、あとはコミュニケーション能力、特に言語能力があるだろう。でも何よりもやはり積極性の不足、というよりは顔の皮がすこし薄すぎるというところだろうか。授業を通じて作った友達は数人いるのだが、しかし特に仲良くしていた人がまさかの突如来学期休学を決意するという事件も発生した。幸い来学期はルームメイトが三人、しかもおそらくすべて現地学生になるはずであるし、来学期の寮自体現在の友達も多く住んでいるので、人づてにという機会も増えるだろう。また、来学期は部活動にもしっかりと入れるよう準備をする予定だし、授業でも少しは上達した中国語と厚かましくなった心とで再度友達作りに励みたい。もちろん今の友達を

大切にしながら。

大学を休学してしまった友達に関してだが、その彼ははるばる故郷の雲南で一人暮らしを開始したので、夏休みが始まり落ち着いたところに半分は彼に行くため、半分は避暑目的で、雲南ついでに貴州旅行に発った。今回はざっと 20 日弱の旅行になり、大部分は相変わらず大宮君と一緒に旅行したのだが、途中麗江では韓国人の友達が合流したり、はじめと最後には人生初(?)の一人旅があったりとなにかとエキサイティングな旅だった。雲南の気候は涼しく快適だし、ご飯はここまでかというほどに胃が求めている味だったし、とまあ楽しい。旅行にはつきもののミルクティー店巡りもかなり当たりの多い旅だった。お腹は幾たびも壊したが。今回の旅のメインディッシュの香格里拉もきれいな場所で、何よりもヤクの群れのいる草原で時間が流れるままに流れるのを堪能するのはまたいい経験になった。昆明では例の友達に再開し、彼と一緒に一日旅行をしたが、改めていい友達だなと思った。またいつの日か再会しなければと思う。



大理の三塔。曇ってはいるが実は空が非常に青い。



昆明の石林公園。圧巻。



ミルクティー。このお店は◎。



ただただ一面の草原と青い空。富士山の高さに広がる街、香格里拉の一部。信じがたい。



ヤク。調理前。



ヤク。調理後。個人的に生涯食べた肉の中で最も好きなお肉。

そんなこんなでだらだらと報告書と呼んでよろしいものか怪しい内容を書いてしまったのだが、最後に少しばかりそれらしい内容を書こうかと思う。まず学習方面に関してはなかなか満足いく内容だった。当初はかなり心配したが、学期が終わって見ると意外と内容は理解できたし、これまでに学習してこなかった新たな内容も学習できた。授業はコミュニケーションスタディの方面の授業をメインで受講したのだが、普段からよく聞くような（情報化社会に関する言説を含め）社会の情報に関する言説に関連する、より詳しい学問的な視点も学んだし、東京大学での二年間の学びをまた結びつけるような役割になったと思う。また、モバイル経済が発達した中国における特有の問題意識についても触れることができた。日本人としては理解しがたいというほどではないかもしれないが、想像しがたいような現象が中国では起きており、そういった問題について見聞きする機会になった。また、当然この分野はメディア方面とかかわりが深い分野なので、中国メディアの立場というこれまた面白い問題についても観察するいい機会になった。非常にざっとした紹介になってしまったが、個人的な関心の問題でもあるので、この程度にしたいと思う。留学におけるもう一つの軸である交流に関しては、まだまだ改善の余地ありといったところだろう。友達との交流に関しては満足しているのだが、やはり新たに作った友達が少ない。今回の留学が二学期のもので本当に良かったななどをつくづく思うってしまう。今までに作った友達との親

交も深められるし、新たな友達を作る機会まである。本来なら一学期でやるべき様なところもあるので、少しずるいが、まあ良い選択をしたと思おうと思う。

留学の成果報告なので文化比較的なことも書かなければと思うのだが、この一学期で最も強く感じたのは、中国人と日本人の公共の意識の違いである。日本にいても中国人の公共意識の日本人から見た異質さは感じられると思う。実をいうと個人的には日本にいるとき公共意識の違いについてあまり強い感覚を持っていなかった。いざ中国で生活を開始して特に中国生活に慣れ切った今になってかえって差異を強く感じる。なぜかイヤフォンを使わない民族、中華民族。なぜかわざわざ（のように自分には映る）音をたててものを食べる。なぜか大きく突き出た腹をまくり上げた服の下からだし涼をとる男たち（北京ビキニと呼ばれる。科学的にはあまり涼しくないはずだが。現在政府により非文明的な行動として規制中。）。ほかにも老人の社交会と化している公園や人目のつく場所で恋愛をかなり大げさに満喫する男女など、違和感のある光景は中国生活においては絶えることがない。しかし、こうした光景を目にしたときに振り替えるのはやはり一日目に昼食をおごってくれた見知らぬおじさんなのである。日本だったらどうなっていたらろう。おそらく誰かが助けてはくれたが、まさかお金は拒否されるなどといったことはあまり起こらないだろう。よくわからないが、そういうふうを考えながら生活をしているとどうやら中国人が見る他人と日本人がみる他人の概念はだいぶ違うらしいと思えるのである。ここで感じるのは、中国人にたいする違和感というよりはむしろ日本人に対する違和感である。なぜ日本人は他人をそこまで他人扱いするのか。日本人は実はかなり公共とプライベートを分けているのではないか。日本人は西洋人と比べて公共とプライベートの境目が緩いなどという文献を読んだことがある気もするが、いずれにしても中国人との比較においてみると、日本人が表の顔と裏の顔のように使い分けている公私の区別が奇妙にすら思える。同時に日本人のおもてなしという言葉の真の意味も見えてきたように思える。が、字数がもうそこまで達してしまったので、これについてはまた一学期考えてみたい。